

# 長崎自然共生フォーラム News Letter

夏季号 (第11号) 2011年7月20日 発行

論説に代えて —

## “「地球温暖化」論にだまされるな!” を再び読んで

事務局長 川里弘孝

ここ数年来、常温の室内ではあるが気温を記録している。しかし例年、月平均気温が総体的に下降気味にあるので、2008年5月講談社から丸山茂樹氏(東工大大学院教授)のセンセーショナルな著書が発行されたのを思い起こし、再読した。丸山教授の要旨を簡略すると以下のとおりである。

地球温暖化の原因はCO<sub>2</sub>ではないのに「不都合な真実」の警鐘とメディアに煽(あお)られ“温暖化狂想曲”となった。ニコラス(イギリス・太陽科学者)は太陽の活発度(太陽黒点の増減:黒点相対数)だけで地球の気温変化は説明できないとし、気温が上がってCO<sub>2</sub>が増えたのか、CO<sub>2</sub>が増えたから気温が上がったのかと疑問を投げかけている。C・ローガン(アメリカ・天文学者)のように「CO<sub>2</sub>犯人説」はIPCC(Intergovernmental Panel on Climate Change:気候変動に関する政府間パネル)の異様な操作ではないかと言う人もいる。スーパーコンピューターによる理論計算では、地球を寒冷化から防いだ雲の定量化のパラメーター(変数)は一定とされているからである。それに雲の形成上、宇宙線が地球の気温に大きな影響をあたえている説もある(デンマーク国立宇宙センター・スベンマーク博士)。

「温室効果」温暖化ガスはH<sub>2</sub>O, CO<sub>2</sub>, メタンなどであるが、地球大気の主成分のうちCO<sub>2</sub>は体積比で0.04%(10000個の分子のうち4個, 350ppm)で、これがないと地球の気温は-18℃となる。気温変化とCO<sub>2</sub>濃度変化は対応しているが「ズレ」がある。たとえばメキシコ・エルチョン火山(1982)のように火山灰が対流圏に巻き上げられ凝結核(水蒸気が粒となる)とき中心の核となる役割)となって雲の大量化による気温低下がある。① 気温が上がれば海水も温められ、CO<sub>2</sub>が空中に放出される。② 化石燃料の燃焼の増加で上昇曲線を描くが、地球の平均気温は下がっている。したがって、CO<sub>2</sub>が大気中に増加したのは事実だが温暖化・寒冷化の主犯ではない(1.4ppm/年の増加:100年間平均1ppm/年で気温0.004℃上昇)。温暖化の結果としてCO<sub>2</sub>が増えたのであって、CO<sub>2</sub>が増えたから温暖化したのではない。大気の主

成分は質量比(%)でN<sub>2</sub>:75.35, O<sub>2</sub>:23.07, アルゴン:1.283, H<sub>2</sub>O:0.33, CO<sub>2</sub>:0.054, O<sub>3</sub>:0.00064である。体積比(%)ではN<sub>2</sub>:78.08, O<sub>2</sub>:20.95, CO<sub>2</sub>:0.04となる。100万個の分子の中でCO<sub>2</sub>が毎年1個増えるからといって急激に温暖化を進めることにほとんど影響ない。これが普通の科学者の常識という。CO<sub>2</sub>犯人説の崩壊である。

雲が増えれば、地表に届く太陽エネルギーが減り気温が下がる。逆に気温が上がるとCO<sub>2</sub>が増える。コーラのビンが温まるとCO<sub>2</sub>が逃げると同じく、海水中のCO<sub>2</sub>が空中に放出する。人間が化石燃料を燃やした結果、排出されたCO<sub>2</sub>の量は上昇曲線を描いている。しかし観測データによる気温は下がっている。火山の噴火や化石燃料の燃焼などによるエアロゾル(微粒子)の浮遊は増加し、雲が増えてさらに寒冷化することとなるが、IPCCはこれを説明していない。

1940年以降、年間1.4ppmのCO<sub>2</sub>増加は紛れもない事実だが、それを「過大評価」して温暖化・寒冷化の「主犯」としてはならない。1.4ppm/年増えた場合、地球の平均気温は0.004℃ずつ上がっていくのがCO<sub>2</sub>犯人説に傾くのは疑問。

地表の影響が少ないハワイ島の観測では気温の上昇は太陽活動の活発度とおおむね比例している(根本順吉, 気象庁:2002)。対立するのがいやなため疑っていても発言しない科学者が多い。現代は氷河期の中の間氷期、本当の恐怖は寒冷化である。「原子核分裂」より「核融合」H<sub>2</sub>とHeの融合によるエネルギーは技術的に難しいので太陽エネルギーだけで生活を目指す、人口調節が必要となる。

- 地球の磁場が弱くなると宇宙線(高エネルギー放射線)や太陽プラズマが大気中に大量に入ってくる。地球の反射率(アルベド)はおおよそ30%だが、うち26%は雲によって大気圏で反射されている。磁場の変化が地球の気温に影響している可能性が高い(外核での大規模な対流がおこる)。
- フィリピン:ピナツボ火山のように大量の火山灰が地球表面を覆うと地球は寒冷化する。CO<sub>2</sub>のみに温暖化の責任を負わせられない。
- 23億年前の地球の「全球凍結」から考えて「雲の制御」が実現可能ならば、赤道付近にメガフロートをつくり稲作を行う(理化学研究所:戒崎信一氏)。CO<sub>2</sub>削減より一石二鳥である(食糧問題も解決)。地球惑星科学, 宇宙物

理学、素粒子・原子核物理学、古気候地質学などによる協同プロジェクトで、太陽相対黒点数が地球の気温を左右する。環境問題（水・大気汚染）は地球規模で考えると「ヒートアイランド現象」「エネルギー問題」であり、温暖化：CO<sub>2</sub> 犯人説は別問題。これは21世紀のマスコミの責任である（マスコミ帝国主義）。

人間の誕生による「文明」の歴史、過去40万年の気温変化つまり10万年周期リズムから見て、太陽活動の変化による温暖化と寒冷化のパターンであり、現代は氷河期の中の間氷期にある（太陽の相対黒点数は100年周期）。CO<sub>2</sub> 排出しようがしまいが気温低下の可能性は高い。樋口敬二（名古屋大学、1960）は、寒冷化が始まっていると説く。グリーンランドでは11℃から8℃に年平均気温が低下している。2035年に最低になるとの海底堆積物の気温変動データがある。温暖化のメリットは食糧増産が可能となり生物多様性が豊かになるが、自然サイドでは人間サイドの豊かさを固定する理由はなく、今の居心地よさを保つためには寒冷化に注目して生態系を温存し自然共生する必要がある。

100年周期の太陽活動の活発化による氷河の減少は認められ、これは海流の変化につながる。また陸地の方が暖まりやすく、北半球の気温の上昇は海流の変化を引き起こす。ハリケーン・台風など異常気象は観測精度の向上と通信網の発達により捕捉されやすくなった。ゲルマン民族の南下、アングロサクソン民族の西移動、アリア人・モンゴル人の南下など民族大移動の頃、わが国では縄文海進時代で2℃暖かだった（現在の東京→青森）。日本への渡来人は聖徳太子の優遇もあり帰化文明を創りあげた。地球の磁場が弱まることは雲が増え人間はじめ生物にとって危険である。

寒冷化対策として環境制御技術がある。気候変動の要因は、①太陽活動、②地球磁場と宇宙線（宇宙線照射量が支配する雲量）、③天体力学、④火山活動、⑤温暖化ガスである。その処方には、①赤道はじめ太平洋に太陽エネルギーを利用して人工島で稲作し、水蒸気を発生させ雲をつくる、②月と地球の間に羽を広げた飛行体を置き、レーザーで地球へ太陽エネルギーを送る、③太陽と地球の中間点に力学的な多数の水ガラスの球（凸レンズ）か調節可能な凹レンズを置く等がある。

そのため科学の歴史を変える、「細分化」を「学際融合」の時代にする。たとえば上部マントルはプレートテクトニクス（地震波トモグラフィ）であるが、下部マントルのプルームテクトニクスは地震学と地質学の融合である（理学流動機構）。またヒートアイランド対策として、①エネルギーの集中利用による排熱、②動物も発熱体である、③都市は石（コンクリート）の塊である、④屋上緑化はまあまあだが、みどりが少ない、⑤高層ビルの増加は太陽エネルギーによる近辺の海面・山地を暖め得ない。⑥東京特有の地形（鍋状底）に加えて埋立によって、埋め立てによる上昇気流は海からの冷たい風をせき止め、ヒートアイランド現象を加速させ、⑦車の排ガスなど温暖化ガスへの影響は

世界平均の380ppmより高く、400ppmとなった。このためコンクリートとアスファルトを熱くなりにくい物質に変えるとか、ビル地下に水・空気を貯留して、より合理的な都市をつくるが必要となった。

人類は多生物共生体である。温暖化は、生物多様性の増加を促し、化学環境の汚染をもたらす、これらは水に溶け込み微生物が増加して（アミノ酸の分子化）水環境の変化を起し、体内摂取は新しい化学物質の摂取となって、体内汚染につながった。

歴史的な技術と科学の取り違えにより、戦略なき日本は「温暖化防止」の美名もとのエコのため「排出権取引」を認めた。寒冷化の影響は、冷害：農作物の不作→飢餓→人の南下となる。人口爆発・食糧難は計画的な人口削減を要する、あるいは戦争を引き起こす。科学不振の時代にならないために「全宇宙的進化論」：時間と空間のスケールで、人類誕生は偶然の積み重ねであることを知る必要がある。このため、①太陽の活動度（相対黒点数とオーロラ）：活動の低下は気温の減少となる、②地球磁場と宇宙線：磁場減少と宇宙線照射量の増加は気温低下となる～温暖化現象とは異なる、③火山の噴火：太陽エネルギー量の減少は気温低下となる、④地球の軌道～地球と太陽との距離は木星と土星の引力によって変わる。地球の傾きは北半球（大陸）への影響し、太陽エネルギーの減少傾向は気温低下となる。⑤温暖化ガスは気温上昇させる。地球気候の今後：世界の平均気温の変化に注目する必要がある・・・

とまあ、複雑系は、相変わらず低脳者を混乱に陥れる。昨今の原子力問題を含め、科学的・技術的解決にはまだ遠いことが、なんとなく理解されたということになる。残された時間は多くないが、今までお世話になった地球、地域、人々にどういう形で恩返しできるか、日々、考えて実践したいと想っている。

## “九州で生物多様性を考える”シンポジウム開かれる！

事務局

平成23年3月4日（金）～6日（日）の3日間、熊本市国際交流会館で九州環境教育ミーティング（KEEM）主催、環境省九州環境パートナーシップオフィス・日本環境教育フォーラム共催によるシンポジウムが開かれ、当会から菅委員と川里事務局長が自主参加して事例発表したので報告する。

初日4日（金）夜には19:00から21:00まで実行委員会が開かれ、参加者も含めて全体会・分科会の最終打ち合わせをした。

1日目は、香坂玲名古屋市立大学大学院准教授の基調講演「九州で生物多様性を考える：生物多様性と環境教育」と

6分科会があった。基調講演は、①生物多様性、②生物多様性条約、③今後の展開の内容で進められ、生物多様性は遺伝子・種・生態系のレベルでとらえられる、生態系の劣化は人間生活にどう影響するか（環境での基本的サービスと物質供給サービス・調節的サービス・文化的サービスが快適な生活とどう結びつくか）、生物多様性条約の歴史と目的（国連人間環境会議：1972からCOP10：2010まで持続可能な開発のための取り決め）を知ったうえで愛知ターゲット（例えば陸域の17%・海域の10%を保護区にする）や名古屋・クアラルンプール議定書などの成果があったこと、今後の展開について開発途上国も含め選択の自由を自発的対策の促進→経済的手法→直接規制へと確実性を高めていく必要性を述べ、今後、国際生物多様性・持続可能な環境教育（ESD）の10年が大切との豊富な経験にもとづく懇切な講話があった。（「まずは身近な生活と生態系のつながりを考えてみるといい」との言葉が印象的だった。）

午後からの分科会は、①センス・オブ・ワンダー：このいきもののふるさとはどこ？、②食と生活：からし蓮根から生物多様性を考える、③農業と生物多様性、④森と林業と生物多様性、⑤「人」が育む草原の生物多様性：草原を守る「人」がいなくなる!？、⑥九州の里と海のいろいろな姿とあるべき姿、で行われ各分科会13名の構成だった。われわれは⑤分科会で、「外来種の駆除活動について」のテーマで用意したスライドを用いて共同で事例発表した。2番目の話題は「阿蘇の草原を守る人がいなくなる？」だった。セイタカアワダチソウの除去と生物多様性について若干、議論できた。

2日目は、午前中、昨日のまとめと全体会議でのプレゼンテーション資料の作成を行い、人と多様性との関わりについての意識を共有した。午後からの全体会議では各分科会ごとにメンバー全員でプレゼンテーションしてそれぞれ質疑応答をなし、15:10に終了した。

注) CBD (Convention on Biological Diversity)

・・・生物多様性条約

COP (Conference of the Parties (to the CBD))

・・・締約国会議

(普段、わかったつもりでいたが改めて勉強させられた。香坂准教授の著書：いのちのつながり、よく分かる生物多様性。中日新聞社、1,429円は初心者向けに手頃である。)

## 平成23年度総会、大村で開かれる！

事務局

今年の総会は、大村・シュシュで開催されました。6月18日(土)午後、大村駅に集合して送迎マイクロバスで会場へ。雨にもかかわらず、集まっていたいただいた会長はじめ12会員に感謝します。車内で幹事会を開き、総会は15:50から“ぶどう畑のレストラン”で行われました。

議案はすべて承認され、無事、終了しました。新役員の方々、よろしくお祈りします。引き続き、山口成美シュシュ社長に基調講演“自然と農、そして食育”をしていただき、ウィットに富んだ氏の話に皆、聞き入りました。恒例の交流会は飲み放題のメニューで弾み、時間を忘れました。帰りのバスは、雨の中、国道・駅経由で二次会場横付け。またまた歌唱コンクールで盛り上がりました。甲乙つけがたい、熱唱に酔いしれました。帰りはそれぞれ、終列車に近かったのではないのでしょうか？

ご多忙の中、宮原会長、松田副会長、お世話いただいた富永さんはじめ、参加の皆さん、協力いただいた牧夫人、ありがとうございました！

(早瀬・川里・来崎・松田・宮原・中瀬・中島・鈴木・為永・富永・山本・吉田、ABC順)



# 日本動物・植物・生態学会九州 支部合同長崎大会開催される

事務局

5月21日(土)、22日(日)に長崎大学教育学部において三学会の合同大会が開催された。委員会・総会のほか一般講演・特別講演があったが、三会場で90名余が集まった。

中西弘樹教授(長崎大・教育)の特別講演「種子散布の謎を解く」は底が深く、身近な話題でもあり、多くの聴取者の共感を呼んだ。海流散布の代表であるココヤシの果実と果皮の漂着頻度は40年間で逆転し、近年は果実をくり抜いた果皮の漂着が多くなった。雨滴散布にはハルリンドウや溪流側のユキノシタ科などがあり、被補食散布で多いのはクスノキ、トウネズミモチ、ナンキンハゼ、クロガネモチの順で、赤い実より黒い実が好まれる。それは脂肪分の多少で目立つより中味(栄養)が濃いことを知っているからである。黒い実は低木層より高木層に多く、クサギのように赤い苞に黒い実になる例もある。付着散布はトゲの大きさ、枯れたときの実の重さ、動物への付着しやすさに係わり、付着高さ・林縁か多年草かなど生育立地や生育型にもランク分け出来る、という身近に見聞きできる事柄が紹介され、質疑応答も白熱した。生態学の一般講演では15題の発表があり、動物系が多かったがいずれも斬新で興味深いものが続いた。とくにヒトに何故右利き・左利きが発生するのかという疑問から、トラフカラツパの巻貝補食行動を調べた研究があり(長総大・環境)、非常に興味ひかれた(川里弘孝)。

## “2010日韓8県市道環境シンポジウム”開かれる！！

事務局

去る、平成22年10月23日(土)日韓海峡沿岸県市道環境技術交流会議主催のシンポジウムが長崎ブリックホール・国際会議場で開かれた。日本側から福岡県・佐賀県・長崎県・山口県、韓国側から釜山広域市・全羅南道・慶尚南道・済州特別自治道の環境技術行政関係者らが一堂に会して、事例・研究発表等を行い情報・意見の交換を行った。基調講演を含め、主な内容を紹介する。

基調講演は、国立環境研究所地球環境研究センター・温暖化リスク評価研究室長：江守正多博士による「地球環境温暖化の現状と将来予測」があった。

地球温暖化のしくみの説明と温室効果ガス濃度と地球平均気温・海面水位は20世紀に急上昇しており、20世紀半ば以降に観測された世界平均気温の上昇は人為起源の温室効果ガスの増加による可能性が非常に高いことを述べ、太陽活動が弱まっていることや次の氷期の到来にも言及して日射の減少はあと3万年以上起こらない、つまり“もうすぐ氷期が来る”は誤りとも指摘した。

次に地球規模の地表気温変化・降水量変化・海面水位変化シミュレーションから異常気象が増えていることを示し、温暖化はどれくらい怖い?と問題提起した。排出された二酸化炭素のどれだけが大気中に残るか?どれくらい排出量を減らせばよいか?など国際交渉における長期目標の言及から、G8サミット宣言(2009)・COP15コペンハーゲン合意の“2°Cを超えない・2°Cより下に”とIPCCや削減量と濃度と気温との関係の不確実性について述べた。さらに、①温暖化は理論的に確か、②「懐疑論」は温暖化理論を覆していない、③種々の予測の大きさには幅がある、④危機感に認識には価値判断が含まれる、⑤世界の排出量を大幅に削減する必要がある、とまとめた。

最後に「私たちに何ができるか」と問いかけ、“心・技・体”即ち価値観・ライフスタイル、省エネ技術・自然エネ技術、社会システム(=制度・インフラ)の構築を訴えた。

事例発表は、●釜山の廃棄物エネルギー化推進事例(資源循環課)、●Refuse Derived Fuel(ゴミ固形化燃料)発電について(福岡県循環型社会推進課)、●高活性炭素繊維(Activated Carbon Fiber)を用いた大気浄化技術の確立(福岡県保健環境研究所)、●ポスト京都体制に備えた最適な対策5GW風力プロジェクト(全羅南道環境政策課)、●太陽光発電の普及への取組みについて(佐賀県地球温暖化対策課)、●住居地域と工業地域の大気汚染物質比較評価(慶尚南道保健環境研究院)、●光化学オキシダント広域濃度分布特性調査(長崎県環境保健研究センター)、●温泉熱を利用したバイオディーゼル燃料製造装置の開発研究(長崎県環境保健研究センター)、●済州道の土壌における重金属濃度分布調査結果(済州道特別自治道環境資源研究院)、●日韓海峡海岸漂着ごみ一斉清掃事業(山口県廃棄物・リサイクル対策課)、●黄砂現象時の大気汚染物質特性及び分布調査結果(山口県環境保健センター)などがあり、各地域が抱えている事情が明らかにされた。この後、江守氏を座長に日韓8県市道発表者による意見交換会があった。

(漂着物や黄砂など日韓の共通する環境問題は緊急かつ重要である。ボランティア活動では限界がある。解決できない部分は外交問題として国家間でアピールする必要があると思う。川里弘孝)

## NPO九州環境カウンセラー協会・NPO環境カウンセラー協会(長崎)共催の環境セミナー開かれる！

事務局

ニューズレター10号分の報告になりますが、去る平成23年2月4日(金)午後に県立美術館・講座室で上記二者の環境セミナーが開かれました。基調講演は宮原長崎総合科学大学名誉教授で「改革への挑戦」と題して日本の環境首

都コンテストの先進事例の論評でした。以下「地球温暖化対策について」（長崎市環境保全課：吉田係長）、「環境汚染物質のリスク管理について」（長崎大学環境科学部：早瀬教授）と続き、いずれも当会主要メンバーによる力強い講演があった。ドイツにおける環境先進自治体である、ハノーバー市・ハム市・ハイデルベルグ市・グリースハイム市において、様々な実施されている環境政策や試みは傾聴に値し、わが国・県で実践できるものがあると感じた。吉田さんは、ながさきエコネットなど市民運動を創出し、一步一步進むことを強調した。早瀬教授は、今までになかったリスクアセスメントの必要性を説き、新しい政策枠組み（リスクコミュニケーション）を促した。会場は満室状態で、質疑応答も時間一杯活発に行われた（事務局 川里弘孝）。

## 都市の風格・風景・個性～(社)日本造園学会九州支部・鹿児島大会への参加と花かごしま2011の印象

事務局

花かごしま2011：第28回全国緑化かごしまフェアに合わせ、5月7、8日の2日間、鹿児島大学（共通教育棟）とおよそ30キロ離れた吉野公園で開かれた。例年の通り、都市緑化機構の共催もあって、国土交通省・環境省や(社)都市計画学会などの後援も受けている。地域における生物多様性や自然回復などの課題、花や緑のまちづくりなど身近な活動による街の魅力向上や地域の活性化、併せて都市の品格や将来のまちづくりのあり方を市民と一緒に考え、議論をしようという趣旨で、まさしく当自然共生フォーラムの目的を实践する中味であった。

一日目の話題は、鹿児島大学学長補佐の小野寺浩氏（元環境省自然保護局長）の「日本の自然、鹿児島の自然」で、とくに豊富な現地経験（九州地区事務所長など）をもとにした「屋久島の作法」や「鹿児島環境学」が聴講者の共感を呼んだ。研究・事例報告会ではA・B会場ともスペース・時間が限られていたが、有益な発表（口頭22例、ポスター10例）があった。特に九州大など植生図化の研究や、長崎県の平戸藩（松浦家）の庭園や出島を扱った南九州大など、若い院生の発想が目立った。

二日目は、東京都市大学教授の涌井史郎氏（元日本国際博・会場総合プロデューサー）の基調講演：「生態環境都市の実現」で始まったが、テレビでおなじみの豊富な話題と喋り上手に感嘆した。氏が提唱する「景観十年、風景百年、風土千年」は、私は以前から秘かに「景観二十年、風景五十年、風土百年」と想い続けているが、大分、時間差がある。国土観と地方観の違いもあるだろう。

シンポジウム：「花と緑、鹿児島新時代」は小野寺浩氏のコーディネートで5人のパネリストに涌井氏が加わって、

あつという間の1時間45分だった。フェアのメイン会場の吉野公園は海拔およそ200mあるためか深い霧に包まれていたが、雨天対応の「花かごステージ」（300席？）があふれるほどの聴衆が集まった。

午後のメイン会場視察には15、6名集まり、若い会場職員の懇切な案内を受けた。またサブ会場には時間の都合上、回遊バスには同乗せず一人でゆっくり見て廻った。野外展示の「島の華園」「暮らしの庭」などが印象的だった。鹿児島中央駅までのシャトルバス（無料）が頻りに往復していたので助かった。

（フェア入場料800円は、運よく高齢者はフリーだったので、昼食に廻せた。滞在中、会員の松田さん、田雑さん、為永さんらに会うことができた。久しぶりの薫風旅行だった。）

## 豊かな大村湾をめざして～EMによる環境浄化のつどい

事務局

平成23年5月14日（土）、大村市民会館においてNPO地球環境・共生ネットワーク（U-net）の主催で9：00から行われた。EMとはeffective microorganisms：有用微生物群の略称で、さまざまな汚れを落とし腐敗菌を抑える働きをもっていることを表す。もともと開発した比嘉照夫名桜大学教授（琉球大学名誉教授）が名づけた。飲用から生ゴミ処理など幅広く、全国的に汎用されているのはご承知の通りである（筆者も十四、五年前、県雲仙公園事務所時代その存在を知らされ、興味は持っていた）。

第一部（～12：00）のまちづくりセミナーでは、比嘉教授の基調講演「環境にやさしい花のまちづくり」と田中克史旧森山町長の事例発表「美しい品格あるまちづくり」があった。比嘉教授はEMの原点は自己責任と社会貢献であること、自らが委員長を務める「全国花のまちづくりコンクール」では1)金をかけない、2)社会的ノイズを排除した環境を整える（花の持つ社会性の尊重）、3)ボランティアを育てる（地域の社会性の向上）、4)地域全体のレベルを上げる（目に見えない資産づくり）、5)日本の伝統を育てる（美しい空間の共有）などスライドを使って強調した。会議室は満席状態だった（70名余）。

田中氏は、人と自然（すべての生き物）が共生するまちづくり「わたしがめざすまちづくり（23.3ha）」を全町民（6,300人）でつくり上げ、全国一（農林大臣賞）に輝いた実績をもとに、真・美・意の追求は人間の永遠で本質的なもので、感性高い人づくりは美しいまちづくりに繋がることを強調した。あわせてゴミ・ゼロミッションを訴えた。そして須磨加寿江さんのオープン・ガーデンの推進を讃えた。

第二部（～17：00）では、U-net事務局（ボランティア）から「善循環の輪」は全国各地に拡がり、東日本では福島

県の143団体を筆頭に岐阜県2団体・富山県10団体、西日本では沖縄・長崎県62団体をはじめ少ない県で香川県3・大分県4との報告があった。続いて県内各地、こどもグループ（大村小）・老人会（大村・上鈴田）・婦人会（諫早市・連合）・地域保護団体（長崎・茂木、琴海）・市町（対馬）など各団体からの事例発表・質疑があり、それぞれ比嘉教授の講評と賛辞を受けた。会場の大ホールには120名余、夜の交流会には80名余が集まり各グループの個性あるプレゼンテーションがあった。

（全国的な動きのある集まりで、自然と農との繋がりを強く感じる機会だった。雲仙市エコ活動連合会の益田会長、馬場さんにお礼申し上げる。）

談話室 —

## 原子力発電について

西部環境調査（株） 来崎良輝

平成23年3月11日に発生した東日本大震災に起因する福島原子力発電所の水素爆発やその後の対応過程は多くの国民（そして世界にも）に、現在の原子力エネルギーの安全利用や今後のエネルギー政策への疑問を投げかけた。

今は情報の時代、パソコンさえあれば多くの情報がどんどん入ってくる。メーリングリスト上に流れる無責任な情報発信、中傷、等々。

私は震災時点において、原子力政策は国策であり、今回の震災だけで原子力廃止等々の意見には賛同しかねていた。それが、ある日メールで「原発がどんなものか知って欲しい」という現場人からの情報があることを知らされた。

それを見ると私の考えは一変した。やはり、現場を知らないで云々言っている、考えてもしょうがないのである。本当の声、私は貝になりたいと言った人等からも、本音をどのように聞き出すことが出来るか？一番困るのは末端の人間であり、その為に何が出来るのか？それを考えるのが日本人の美德ではなかったのか？

そう思っているだけで実際は行動が伴わない。きれいごとを並べても所詮私も半端な日本人。

資料：<http://www.iam-t.jp/HIRAI/pageall.html>

“原発がどんなものか知って欲しい”

## ブックガイド

読みたい本はいくらでもあるが、なかなか読みこなせない。

- 日本の官僚（櫻井よしこ）新潮社。285pp。  
（やや自民党よりだが日本の官僚の考え方や実践方法を客観的に捉えている。とくに日本にとって大切な外交と国防に言及しており、徹底的に中国嫌いが行間から滲み出ている。中国は怖いな。）
- 森と人間の文化史（只木良也）NHKブックス。233pp。  
（森林生態学の専門家が一般向けにわかりやすく書いた本

である）

- マツの森をまもる（東京大学演習林「マツの森をまもる」編集委員会）東京大学演習林出版局。147pp。  
新居演習林の由来、黒松植栽、松枯れ、対策（広葉樹を生かす）等々。現在までの流れを簡易にまとめている。私は、加津佐、千々石、唐比、東彼杵ぐらいいしか思いつきませんが、過去における長崎県の海岸景観には、もう少しクロマツ林が入っていたのではないのでしょうか。（来崎）

## 事務局だより

- 削除による退会会員が増え、会の会計が逼迫しています。会費納入、広告掲載にご協力ください。  
退会者：庄籠良一（H22.12）
- ボランティア募集（予告）7月末から9月末の間にセイタカアワダチソウの駆除作業があります。乞う参加。

## 編集後記

梅雨が明けて夏到来、いよいよ実践活動の時期となりました。やはり夏季号は総会に間に合わせる事が出来ませんでした。皆さんに原稿依頼するのに腰が引けて…。定期的に特集を組むこともせず、成り行きまかせではいいニュースレターも出来ません…。（反省中）。県費補助ではボランティア活動も義務付けられ、会員の奮闘にすぎります。（K）

### 【編集部から】

原稿を募集します。論説・随想・紀行文・技術報告・写真等、体裁は問いません。500～1,200字程度でお願いします。二段組みはこちらでやります。E-mailでの投稿、大歓迎です。（M） [nagasaki\\_coexistence@hotmail.com](mailto:nagasaki_coexistence@hotmail.com)

<b>事務局</b>	<b>会長</b>	<b>宮原和明</b> 〒850-0036 長崎市五島町3-3-206 NPO環境カウンセリング協会長崎 TEL: 095-818-3305/FAX: 095-826-3693 牧: 090-7161-5408 HP: <a href="http://www.nature-man.org/index.html">http://www.nature-man.org/index.html</a> E-mail: <a href="mailto:Nagasaki_coexistence@hotmail.com">Nagasaki_coexistence@hotmail.com</a>
<b>アネックス1</b>	<b>事務局長</b>	<b>川里弘孝</b> 〒856-0824 大村市水田町1098 （長崎大学大学院生産科学研究科） TEL: 0957-50-1355 FAX: 0957-50-1355
<b>アネックス2</b>	<b>副事務局長</b>	<b>為永一夫（県央地区担当）</b> 〒856-0820 大村市協和町790（株）タメナガ造園 TEL: 0957-54-0271 FAX: 0957-54-1127
<b>アネックス3</b>	<b>副事務局長</b>	<b>赤瀬憲市（県南地区担当）</b> 〒851-0104 長崎市船石町1184（株）水樹 TEL: 095-839-1860 FAX: 095-839-9103
<b>アネックス4</b>	<b>副事務局長</b>	<b>田維豪裕（県北地区担当）</b> 〒857-1161 佐世保市大塔町574-5（株）庭建 TEL: 0956-31-2011 FAX: 0956-31-2310